

2016年9月「映画で逢える、映画と出会う」をコンセプトに各地の有志で結成された私たち「シネマ・デ・アエルプロジェクト」は、岩手県宮古市で、コミュニティシアターの運営を行っています。2011年の東日本大震災で大きく被災した宮古市は懸命な復興事業にもかかわらず、現在は震災当時から約1万3000人、率にして20%以上の人口が減少し、4万7000人程度の地域です。復興関連事業の終了後は観光、水産業など主だった業種で地域を牽引してきた事業者の破綻が相次ぎ、これからの暮らしをどうしていくのか、あらためて厳しい現実を突きつけられています。

そんな向かい風のなか、私たちは「出会いが生まれる場」「質の高い文化体験」「地域の新たな文化資本」としてのシアター運営を行っています。きっかけは2016年まで岩手県沿岸で唯一の常設映画館であった市内の映画館「みやこシネマリー」の閉館でした。「みやこシネマリー」は、1991年に当時宮古市最後の常設映画館がなくなったあと、1997年に多数の市民出資によって「みやこ映画生協」を母体に開設されました。日本で初めて映画上映を目的に設立された生活協同組合が運営するこのユニークな映画館は、市民の力で暮らしの環境を整えてきたシンボルであり、映画に親しむ地域文化の土壌となりました。映画館は震災後も精力的に上映を続け「心の復興」を牽引する存在でしたが、人口減少による観客減、地域経済の不振などを受け、やむなく閉館となりました。再び映画館が途絶えた喪失感とともに「このままでは街が、街としての活力を失い、復興と地域の再生の意欲が失われてしまう」私たちはこの時強い不安を感じていました。

まちむら発見①

協働によるコミュニティシアターの運営

岩手県宮古市 シネマ・デ・アエルプロジェクト

そして、このことがきっかけとなり、みやこシネマリーンが育んだ映画文化のバトンを引き継ぐため、後にシネマ・デ・アエルの結成につながる「みやこシン・シアタープロジェクト」が立ち上がり「あたらしいシアターを作るなら、どんなシアターにしたい？」の呼びかけに有志が集いました。

都市型の事業である「映画館」が存続するためには、一般的に30〜50万程度の人口規模が必要と言われています。周辺50キロに範囲を広げても8万人程度の人口規模、いわば、映画館限界地域「の宮古市では」「みやこシネマリーン」が継続してきたことそのものが奇跡的であり、この先人口急減が確実な地域で、新たな資金を投じ、映画館を立ち上げることは「みやこシネマリーン」の苦労を間近で見てきた私たちにとって、無謀な試みであることは明白でした。収益の見込みは限りなく低い、しかし多くの方の支えでここまで進んだ、復興の歩みを止めたくない。相反する難題の前に、不安を抱えながらもみやこシン・シアタープロジェクトは構想とアイデアを練る日々を続けました。

シネマ・デ・アエルがコミュニティシアターとして活用させていただいているのは、宮古市で藩政時代より交易、酒造業など幅広い事業を行い、旧酒蔵を倉庫として使用している「東屋」さんの蔵です。みやこシン・シアタープロジェクトを立ち上げた当初、場所の見当もなかった私たちは、場所探しの街歩きをする中、奇跡的に津波を免れた中心部の一角に佇み、立派な主屋を構える東屋さんの建物が気になり、その威容に見入っていたところ、私たちを不審に思ったご主人に声をかけられました。心の復興を支えてきた市民映画館がな

くなること、なんとか次の場を作りたいと思っていることなど、駆け足に説明した私たちの想いを聞いてくださったご主人は「奥にある旧酒蔵なら使えるかもしれないよ」と、なんの面識もない私たちを招き入れてくださいました。実はご主人は、みやこシネマリーンに出資していた市民のひとりとして、閉館に心を痛めておられました。ここには、地域の文化を自ら支えてきた市民がたくさん存在していることを実感し、私たちのチャレンジは、多くの方の関わりと協働のもとに成すもの。という確信が生まれた出会いでした。

その後、シン・シアタープロジェクトは、東屋さんの「蔵」を拠点に、映画を軸としつつ、映画以外の多くの「何か」「誰か」に出会うことができる場としてのあり方、メンバーそれぞれがオーナーシップを持ち、できる範囲で時間、アイデア、ノウハウを持ち寄る運営方法を軸に、収益は出なくとも楽しみながら持続できるコミュニティシアターの開設を目指し、集まりの名称を「シネマ・デ・アエルプロジェクト」にあらため歩みを進めました。

それから約7年、蔵を掃除し、椅子とスクリーン、プロジェクターを置いてただけで始まった手作りのシアター「シネマ・デ・アエル」は、当初から変わらず月に2、3日程度、2、3本の厳選作品だけを上映する規模のまま、都市部のシネコンのような快適な空間へのバージョンアップも果たしていません。しかし、それまで倉庫として利用されていた酒蔵は、映画という日常の中の非日常を体験する場、地域の新たな文化資本として、遠く隣県からも来場者を得るようになり、様々な出会いを育む場として生まれ変わりました。またシアターの活用をきっかけのひとつに、多くの災害に耐え



見学に訪れた大学生たち



シアター空間

残った歴史的建築の蔵と主屋は2019年、宮古市中心部で唯一、三陸沿岸部の市街地でも希少な国有有形文化財に登録され、地域の災害と街の成り立ちの歴史、防災、減災を学ぶ場としても活用しています。そして、理念に共感し各地から集まったシネマ・デ・アエルプロジェクトの運営メンバーは市内や近隣市町村だけでなく秋田、宮城、首都圏などにも広がり、世代も仕事も経歴も様々な方々が、フラットな関係でプロジェクトに参加しています。

今、映画館に限らず、全国各地で書店、個人商店など生活、文化を支え愛されてきた場所が人口減少や後継不足から急速になくなり、暮らしの足元が揺らいでいます。そんななかシネマ・デ・アエルの活動は、新たなあり方（モデル）として注目され、チャレンジの参考にしていただくことが増えました。特に地方出身の大学生、高校生など、自分の故郷に誇りを持ちたくとも文化に触れる機会が少なく都市部との格差を感じている若者の関心はとりわけ強く、多くの見学、インターン、卒論の研究を通じ、シネマ・デ・アエルのスタイルをヒントにふるさとの未来を模索してくれています。

たくさん映画を観ることもできない、ふかふかの立派なシートもないけれど、ここに来ると誰かや何かに出会いたい繋がることができる。小さな街の暮らしが少しでも豊かになる、そんなコミュニティシアターを私たちは続けていきます。そして映画と地域の新たな「あり方」を模索している各地の方々に、私たちが培ってきた経験やノウハウをシェアし、つながりを作りたいと考えています。ぜひシネマ・デ・アエルに「会い」にきてください。

（シネマ・デ・アエルプロジェクト 有坂民夫／前澤梨奈）